

# 松 風

## 福島県公立学校退職校長会

郷土の祭り紹介…………… 1  
 論壇、随想…………… 2  
 社会貢献活動の先例に学ぶ…………… 3  
 趣味と生きがい…………… 4  
 「寿詞・賀寿・賀詞」該当会員、他…………… 5  
 特色あるクラブ活動、他…………… 6

〒960-8107 福島市浜田町4-16 富士ビル2階  
 TEL (024) 534-5411  
 FAX (024) 531-1195



会津盆地の中程に位置する湯川村の勝常寺では毎年四月二十八日に先祖の供養や五穀豊穡などを祈願して念仏踊りが行われています。この念仏踊りは、県の重要無形民俗文化財に指定されており、この日は多くの方にお越しいただいております。もちろん、全国に名の知られた祭りではありませんが、今回紹介の機会をいただき嬉しく思います。

**交流**

かつて、会津には「会津大念仏撰取講」が二十四団体あったそうですが、現在は喜多方市熊倉町小沼地区、同市塩川町中ノ目地区、そして勝常寺念仏踊りの三団体が現存するのみです。この三団体の念仏撰取講の方々は今でもお互いに交流し、信仰と伝統文化の継承を続けています。

**「デコデンのデン」**

この念仏踊りも太平洋戦争時に中断し、終戦後一時復活しましたが、その後再度中断して、昭和五十五年

に再び復活しました。その後、さらに現在のような規模になるには大変な苦労があったようです。湯川村念仏踊り保存会長の高橋新さんも「会員のなり手を見つけてるのが大変です。」と話されており、

そこで、小学生に郷土の文化に関わってもらいたいと、大人の会員と一緒に練習し、本番でも楽器の演奏や踊りを披露しています。

この時に、踊りや楽器演奏のタイミングを合わせるのに「デコデンのデン」という調子を使います。

**桜の花の下で**

勝常寺の境内には桜の大木があり、祭礼の四月二十八日に満開となることもあります。(最近は桜の開花が早くなり、桜の花びらが散ってしまう年が多いです。)

春の日にこの念仏踊りをご覧いただけたら幸いです。

なお、境内には国宝の仏像もあり、四月～十一月の間拝観することができます。その時は予約が必要です。

郷土の祭り紹介

### 勝常寺の祭礼「念仏踊り」

両沼支部 金 成 昌 昭

令和五年十一月二十六日に県営あづま球場で開催された本大会を観戦する機会があった。本大会は、福島市が生んだ偉大な作曲家「古関裕而氏」の野球殿堂入りを記念して開催されたもので、バックネット裏から参観した様子と感じたことを述べてみたい。

一、両校のEメール交換  
試合前の開会セレモ

ニーに先立ち、両校の校歌斉唱によるEメール交換が行われた。

まず、一塁側の上部階段通路から、演奏に合わせた早稲田大学の校旗入場があり、続いて三塁側の上部階段通路から、演奏に合わせた慶応大学の校旗入場があった。その様子をもう少し述べると、校旗を持った応援団員の一步踏みしめながらの、厳かな入場シーン。その相手校入場の際に、対戦

校側の応援団の直立不動の姿。さらには一般の応援席も総立ちで、相手校の入場、応援を見守る姿。この相手校に対する敬意の思いをきりつとした態度で示している姿に、これまでに味わったことのない感動を覚えた。福島で大学時代を過ごした私は、早慶戦を観るのは初めてのこともあり、すっかり心を動かされてしまった。

裕而氏作曲による、早稲田側は「紺碧の空」、慶応側は「我ぞ覇者」の大会合唱。四回はもろんのこと、私は、各回で繰り広げられる応援団のリーダー陣の体全身を使っている援席全体を鼓舞している力強い姿と演奏に合わせ、重厚かつ力強く一心不乱に叩き続けるバスドラム奏者の姿に、すっかりりきりき付けた。応援

論壇

全早慶野球戦  
福島大会を観戦して

副会長 鈴木昭雄



まいった。応援団の長き伝統を受け継ぎ、母校に対する限らない熱い思いを体現する若者の姿から、多くのパ

ワーを頂いた。そして、神宮球場での早慶戦、熱き応援合戦を観戦したくなってきた。今である。

二、「栄冠は君に輝く」  
開会セレモニーでは、主催者や来賓のあいさつの後に、両校へのEメールとして、福島大学四年の赤坂佑介君による「栄冠は君に輝く」の独唱が披露され、力強く透き通った声が球場内に響き渡り、私も胸の内と一緒に斉唱させてもらった。



古関裕而 (駅前ピアノ)

三、四回の表裏の応援  
四回の攻撃時には、古関

随想

「野菜を育てる」



東白川支部  
古張 金一

知人に会うと「何してるの」とよく聞かれ、「何もしてない」と答える。「野菜をつくっているよ」と答える。退職校長会の園芸クラブに混せて頂き、主に野菜の栽培に取り組み、農業の真似事をしている。栽培は、鳥、虫、野生動物、天気、難敵に襲われ、大変で、一つでもそれらしく育つと嬉しいものである。

園芸クラブの専門家である部長さんの講話を聴き、土壌の三相、化学性、酸度などを学び、真似しながら栽培を楽しんでいる。しかし、専門家のようにはいかず、私に育てられる野菜に申し訳なく思う次第である。私に種を蒔かれたばかりに、途中で枯れたり、害虫や動物にかじられたりして、最後には人間に食される

のである。物言えぬ野菜にとつては、如何なものか。今この時期に何をどうすればよいのか、「何もしない」という私は、野菜の様子からすべき作業を教わるのである。何もしないで勝手に育つ野菜もあるが、品種改良の野菜は、病気には弱い。人間と同様に適切な栄養が大切で、栽培は知恵の結晶である。様々な悪条件を克服し、手塩にかけた野菜を食べるのは、格別である。

医食同源についても講話があり、玉ねぎの薬効であるプロスタグランジンAの抗がん作用について学び、野菜の三つの力、抗酸化力、免疫力、解毒力についても教えられ、健康になる野菜の摂取について学ぶことができた。

化学的根拠に基づく農業の奥深さや困難を改めて知ることになっている。何もしないでいることは難しい。真似事をしながら、理論と実践の結晶であるおいしい野菜を育てられるようになった。

社会貢献活動の先例に学ぶ



HAMADDOOR13

代表理事 吉田 学氏に聞く

令和六年一月十一日、大熊インキュベーションションセンター(大熊町立大野小学校)において、HAMADDOOR13の代表理事の吉田学氏(大熊町出身、四十八歳)にその取組等を伺った。

◇立ち上げの経緯

震災時、原子力発電所の中で働いていて、次の日には避難。転々としながら神奈川県まで避難。復旧事業に携わっていたのですが地元に戻る。建築士の資格があり家屋調査や実態調査などの業務をやっていた。町を取りもどそうと次第に先輩、後輩も戻って来て、それぞれに活動していた。そこで「地区を越えて協力する体制をつくっていかないか」と呼びかけたのがきっかけ。その後、みんなで協力し合うこの集まりをHAMADDOOR13(いわきから新地までの浜通り13町村)と

名付けた。

◇HAMADDOOR13は協力し助け合う母集団

情報や課題を共有して自分ができることを少しでも手伝えるような母集団をつくる。皆でその情報を共有するとともにコミュニケーションを支える母体を大きくして活動を支援する。「仲間になりましょう、情報を共有しよう」というのが理念。地域で困っている人たちがや若者たちが情報を共有して集まりをつくる。例えば、スポーツが得意な人であったらスポーツイベントとか協力すればいいし、文科系、産業界でもいい、自分ができそうな情報をもらったらできる範囲でお手伝いすればいい。今で



はメンバーは三百人ぐらいいる。

◇フェニックスプロジェクトで若者を支援

震災・原子力災害後、浜通り地域の双葉郡は基幹産業が無くなってしまった。新たな産業づくりを若い人たちを中心にできないかと考え、フェニックスプロジェクトとして若者の起業支援をしている。ここから育った人たちはふるさとに愛着をもち、企業、事業として大きく成長している。現在十八社が起業している。

◇個をつなぐプラットフォームとしてネットワークを広げて

メンバーがそれぞれ個で活躍している。それをつないでいるプラットフォームがHAMADDOOR13である。誰でも入れる、参加しやすい、依頼しやすい組織を目指している。例えば、県大会、全国大会に行くけれど協賛金が足りない、誰か出してくれる人はいないかと頼めばいい。その時は誰でもいいし、全国からで

もいいので、協力できる人が協力するという、ネットワークを広げていきたい。

◇基本的な会の運営

事業で得たお金でこの会を運営する。一般社団法人として独立させることが継続していく重要なポイント。インフラ整備をするための調査業務やコンサル業務とか、これを都会の大企業ではなく、地元の人たちでやる。そういうノウハウをつくり、高め、そこで得た収益を会の運営に充て、循環できるシステムをつくり、持続可能なものにしていきたい。

◇日本全国に発信したい

今、目指しているところは、イノベーションを起す、新しい事業に取り組んでいくこと。少子高齢化、過疎化していく地域が増える中で、どういう仕組みが必要か、社会福祉関係、交通も含めて、ここで取り組んでいることが地域のモデルとして日本全国に伝えることができればいい。

◇活動を支える思い

何でこうして集まっているのかというところ、それは「この地域をみんなが愛して好きだから。だからここに居場所をつくるんでしょ。ふるさとのために頑張らなう。その気持ちだけはどうしても負けない」という思いから。この十二年間で経験させてもらって、失ったものも大きいけれど、その後には得たものも大きかった。

【取材を終えて】



大熊インキュベーションションセンターで

震災・原子力災害後、浜通りの若者たちが協力し合い、地域を活性化しようと思いを向いて活動している姿や思いを知ることができた。約一時間にわたり、快く取材に応じてくれた吉田氏に感謝申し上げます。

趣味と生きがい

日本の伝統文化の紹介



西白河支部  
根本 晴夫

退職後の人生を趣味の面からも充実させようと、写真クラブに入会しました。例会や作品展を通して切磋琢磨しています。撮影がとても楽しくなりました。続いて、文部省による海外派遣以来の念願であった「日本の伝統文化の紹介」をすることになりました。そのことを、私自身が学んだことも含めて次に述べてみます。一、アイルランド・ドロエダの中高一貫校に滞在中、校長先生に茶道（益略手前）を紹介し、点てたお茶を飲んでいただきました。感想は「ピース&カーム！で、びっくりしました。常日頃宗匠が口癖にしている「和敬清寂」と一致したからです。お点前のプロセスの大切さを改めて学びました。二、カナダの首都オタワワの中高生に日本語・書道、茶

道、折り紙を紹介しました。強い興味・関心を示しました。なお、紙飛行機を完成させた後、和気藹々と飛ばすのを楽しんでいました。担任の先生に仲の良い理由を尋ねました。答はカナダ人意識が強いから！でした。

趣味としての写真撮影や海外での「日本の伝統文化の紹介」はこれからも続けていきたいと思っています。



茶道の紹介

短歌は生きた「軌跡」



郡山支部  
今野 隆

とりあえず、拙歌二首。「地下足袋の女職人風纏ひ薔薇咲く園を軽やかにゆく」

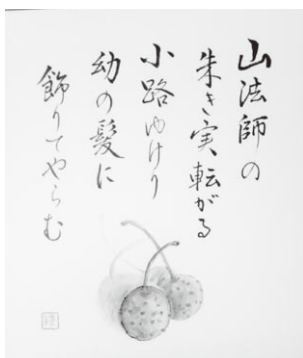
教職を辞し市役所勤めの昼休み。近くのバラ園が満開で地下足袋の女職人さんが颯爽と手入れをしていた。「胎内をさながら宇宙船として君は漂ふ 真つすぐに来い」

待望の初孫の懐妊を伝えられ、新しい命が真つ直ぐに無事生まれてくることを願って詠んだ歌である。

私は震災前から「短歌らしきもの」を始めた。拙い歌ばかりだが、一首を読めば「その時」の思いが蘇る。つまり一首一首が私の心の遍歴、生きた軌跡である。

現在、四つの短歌会に所属。月一度の「歌会」はいつもわくわくする時間。歌会のメンバーは五十代から来年白寿の方まで。職業が何であるか全く無関係。歌会では名を伏せた出詠歌へ各人が投票し寸評を述べ合う。老いの孤独、四季の移ろい、時事詠、挽歌、家族のこと等々、すべてがテーマとなる。もちろん短歌の技能も厳しく批評される。短歌は俵万智以降若い世代にもSNS等で口語調の

短歌がブームとなった。俳句と違って三十一文字の端歌には季語はない。短歌を詠む人は皆、歌人である。言葉の海からふっと浮かんでくる言の葉を並べる。そして入れ替える。削る。足し算の後の引き算。そんな「推敲」もまた一興。短歌の道、まだまだ頂は遠い。



生きがいを求めて



相馬支部  
伊達 孝行

退職して十年目になるが、これまで大切にしてきたことが二つある。

その一つが、東日本大震災で亡くなった子供の供養を目的で始めた木彫である。仏像を中心に始めて七年になる。思うように上達

しないが、これまで如来像や観音像、毘沙門天像、金剛力士像などを彫ってきた。

立方体の木の塊を一つの形になるまで彫り上げるには、苦労もあるが醍醐味もある。木の香りや温もりに触れることは、ストレスの解消にもなる。

今後は、木との対話を重視しながら仏像以外の作品にも取り組んでいきたい。二つ目は、地域との繋がりが。地域の役員の経験や契機に、地域と密接になった。

今では、地域の役員はもとより、草刈りや野菜の収穫などの活動を通していろいろな人たちとの交流を深めている。飲む機会も含めて、異なる人生を歩んできた人たちとの会話は実に楽しい。時には、緊張することや気遣いが必要であるが、これまでにないものが見方や考え方に触れることができ、新たな発見や学びにつながる。これからの人生の生きがいや豊かさを考える上でも、今後ともできる限り他地域の人たちとの交流を続けていきたい。

令和六年度 「寿詞・賀寿・賀詞」 該当会員名簿

一 「寿詞」(満百歳)

大正十三年四月二日

大正十四年四月一日生まれ

- 1 双葉 猪狩 保様
- 2 東白川 矢吹 啓雄様

二 「賀寿」(満九十五歳)

昭和四年四月二日

昭和五年四月一日生まれ

- 1 南会津 野中 儀一様
- 2 両 沼 目黒 寅一様
- 3 郡 山 大内 次男様
- 4 相 馬 岩本 勝博様
- 5 相 馬 門馬 秀夫様
- 6 北会津 五十嵐 實様
- 7 郡 山 宗像 金三様
- 8 郡 山 菅野 良樹様
- 9 郡 山 折笠 仙衛様
- 10 福 島 工藤 忠様
- 11 安 達 菅野 次男様
- 12 北会津 遠藤 孝様
- 13 田 村 佐久間末雄様
- 14 福 島 米畑 勇様
- 15 北会津 渡部 幸久様
- 16 郡 山 橋本 壽巳様
- 17 西白河 仁科 武芳様
- 18 福 島 田中 光雄様
- 19 双 葉 渡辺 友綱様

三 「賀詞」(満八十八歳)

昭和十二年四月二日

昭和十二年四月一日生まれ

- 20 郡 山 宮地 五郎様
- 21 福 島 後藤真太郎様
- 22 いわき 阿部 郁夫様
- 23 福 島 金子 忠雄様
- 24 西白河 大塚 克正様
- 25 いわき 佐川 芳雄様
- 26 いわき 横山 元雄様
- 27 東白川 白石 信雄様
- 28 福 島 山川 進一様
- 1 かわき 遠藤 俊博様
- 2 相 馬 草野 博夫様
- 3 いわき 高萩 貞弘様
- 4 郡 山 渡邊喜八郎様
- 5 安 達 伊東 博様
- 6 東白川 根本 忠義様
- 7 伊 達 高橋 俊彰様
- 8 岩 瀬 岩井 肇様
- 9 北会津 古川 憲男様
- 10 東白川 木村 澄夫様
- 11 安 達 千葉 昇様
- 12 郡 山 橋本 倭次様
- 13 いわき 大平 健一様
- 14 北会津 若林 正一様
- 15 両 沼 芦沢 健様
- 16 福 島 松沢 四郎様

- 17 福 島 長久保宏人様
- 18 双 葉 岸 眞様
- 19 伊 達 大槻 太様
- 20 西白河 佐藤勝三郎様
- 21 両 沼 湯田 厚様
- 22 郡 山 矢内 俊彦様
- 23 郡 山 高橋昭悟郎様
- 24 耶 麻 西村 新六様
- 25 岩 瀬 西間木俊夫様
- 26 伊 達 加藤 久嗣様
- 27 西白河 金内啓四郎様
- 28 郡 山 遠藤 太様
- 29 安 達 渡邊 貞雄様
- 30 両 沼 長谷川慶二郎様
- 31 耶 麻 秦 敬輔様
- 32 岩 瀬 小松善二郎様
- 33 郡 山 一箭 武男様
- 34 いわき 白土 吉則様
- 35 双 葉 宇佐美忠良様
- 36 北会津 渡部 義久様
- 37 福 島 高橋正二郎様
- 38 福 島 深澤 一榮様
- 39 北会津 福田 睦之様
- 40 西白河 小森 勇様
- 41 岩 瀬 諸橋 恒夫様
- 42 郡 山 古川 将男様
- 43 福 島 大槻 高仁様
- 44 福 島 鈴木 信良様
- 45 郡 山 鈴木 剛之様
- 46 いわき 高木 啓子様
- 47 北会津 森田 慶一様
- 48 福 島 佐々木 理様
- 49 岩 瀬 吉田 尊夫様

- 50 相 馬 丹野 鐵生様
- 51 相 馬 高野 謙一様
- 52 耶 麻 佐藤 達雄様
- 53 岩 瀬 薄井 賢一様
- 54 西白河 鈴木 俊雄様
- 55 福 島 朽木 耕作様
- 56 郡 山 阿部 幸治様
- 57 北会津 菊地 庄意様
- 58 いわき 三瓶 昌宏様
- 59 いわき 前田 権様
- 60 福 島 佐藤 功様
- 61 いわき 坂本 高様
- 62 北会津 山内 昇様
- 63 東白川 二瓶 正夫様
- 64 いわき 遠藤 孝様
- 65 安 達 渡邊 一弘様

▽主管  
福島県公立学校退職校長  
会安達支部

一 期 日  
令和六年六月十二日(水)

二 会 場  
二本松御苑  
二本松市金色久保  
電話(〇二四三)  
二三―三九二一

三 大会日程  
受 付 十時  
開会式 十時三十分  
講 演 十一時二十分

《演題》  
「父 大山忠作について」  
《講師》大山 采子様

・昼食・懇談  
十二時二十分  
・体験発表 十三時十分  
石川支部・耶麻支部・  
いわき支部

・大会宣言  
十四時三十五分  
・閉会式  
十四時四十五分

四 会 費  
・千五百円

五 参加人数  
・二百十名程度

お知らせ

創立六十年記念第五十八回  
福島県公立学校退職校長会  
二本松大会開催について

▽主 催  
・福島県公立学校  
退職校長会

▽後 援  
・二本松市教育委員会  
・福島県市町村教育委員会  
連絡協議会安達支会

特色あるクラブ活動

白銀は招くよ

北会津支部

私達は雪国会津に生まれ、小さい頃から冬は雪まみれになって遊び、物心つく頃にはスキーを楽しんでいました。勿論小学校の冬の授業はスキーで、校庭にはスキー練習用の山が作られています。

クラブ員のほとんどが体育教師で、現職時代は中体連スキー大会の指導や大会運営に携わってきました。退職後は平日のがらんと空いたゲレンデを一人で一気に滑降したり、土日はお孫さんや家族と共に楽しんでいたりする姿をお互いによく見かけます。そこで総会の時に「結構スキーを楽しんでいる人がいるのでスキークラブでも作って、時々仲間内で滑りませんか」と声を掛けるとすぐに十名程が賛同してくれました。

クラブと言っても個人の生活リズムを崩すことなく、グループラインでスキー

場の積雪・雪質・混み具合や各自の予定等を情報交換し合い、都合のつく何人かで滑っています。そして年一回は皆で滑って、夜は温泉でお座スキーをというのが趣旨の会です。一人も良し！仲間と一緒に滑るのもまた良し！

シー・ハイル (SCHIEHL) (スキークラブ 川島 宏)



特色ある活動紹介

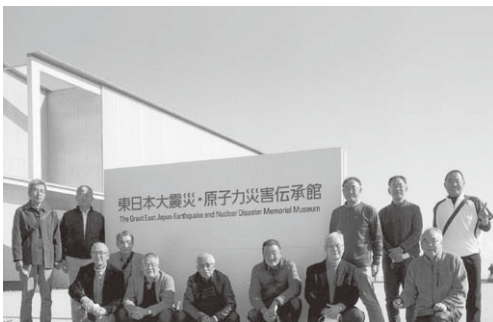
会員交流を図る 事業の継続

田村支部

かつては単発的に田村支部研修旅行を実施していましたが、現在は、支部の恒例行事として「研修旅行」を事業計画に組み入れ、毎年実施しています。「研修旅行」は「旅行中の懇談を

通して会員相互の親睦を深めるとともに相互の健康増進を図る」ことをねらいとし、研修視察に合わせ、会員相互の交流・親睦を図るべく、旅先での「会食」にも毎回工夫を凝らしています。その土地ならではの名物に舌鼓をうち、お酒を酌み交わしながらの時間もとても楽しいひとときとなっています。

令和二・三年度は、コロナ禍で中止せざるを得ませんでした。近年では「仙台・松島方面(瑞巖寺、キリンビール工場)」「会津坂下町方面(ころり三観音)」「新潟方面(市島邸、豪農の館)」「山形方面(熊野大



東日本大震災・原子力災害伝承館にて

社、高畑ワイナリー)」「日光方面(東照宮、田母沢御用邸)」「双葉町・浪江町方面(東日本大震災・原子力災害伝承館、震災遺構請戸小学校)」などに出かけています。

恒例の行事としてこれからも参加意欲をそそる場所や地域の名物を提供していきたいと思っています。(田村支部 広報部)

定年引上げに係る福島県公立学校退職校長会会則の一部改正について

定年引上げに係る条例改正で、令和五年四月から二一年に一歳ずつ定年を引上げ(令和五年四月の定年年齢は原則六十歳)令和十三年四月に六十五歳となります。また、六十歳に達した役職管理監督者(校長等)は役職定年となり、原則として教諭等の職に降任します。そこで、本会は役職(校長)定年者を退職校長とみなし、会則の一部改正を行いました。

(組織) 第4条 この会の会員は、福島県の公立学校長職にあった退職者、および役職(校長)定年者をもって組織する。更に現職にある公立学校長を賛助会員とすることができ。 (令和五年十二月八日 改正施行)

各支部においては、例年どおり新入会員の勧誘をお願いいたします。

編集後記

一月、取材のため大熊町に出かけましたが、人影も民家もまばらで、復興はまだまだ先のようにです。今回特集したHAMADORI13がこの度、「第十四回地域再生大賞」優秀賞に選ばれました。更なる発展と活躍を願っています。



ホームページ二次元コード 【会員専用パスワード】 9604162 毎月1日は閲覧日